

Beyond the Horizon における放浪できない女性たち

永田優衣

1. はじめに

Beyond the Horizon は、1920年に初演されたユージン・オニールの長編戯曲であり、彼に最初のピューリッツァー賞をもたらした作品である。本作品では、農家の兄弟であるアンドリューとロバート、そのどちらもが思いを寄せるルースを中心に物語が展開する。弟のロバートは夢想家の青年であり、実家を出て航海に出ることを夢見ている。一方の兄アンドリューは現実的な人間で、隣家の娘ルースと結婚し農業を営んでいくはずであった。ロバートは航海の機会を得るが、出発直前、ルースに秘めていた思いを告げる。ルースがそれに応じる形で2人は結ばれ、ロバートは出発を取りやめて、代わりにアンドリューが航海に出ることとなる。その後のロバートは自身の気質に合わない農業をうまく営むことができず、ルースにも責め立てられ、心身ともに病んでいく。

ルースは心変わりを繰り返した挙句ロバートを厳しく非難するなど、兄弟の運命を狂わせる女性としてとらえることも可能である。一方で、兄弟と同じく彼女もまた地平の彼方に憧れを抱きながら家庭から離れられない状況にあるということは注目に値するだろう。また彼女の母親は足の不自由な女性であり、思うように身体を動かさないために家族の介助を必要としている。本発表では、ルースを中心とする女性登場人物が家庭や外の世界をどのようにとらえているかに注目し、彼女たちの言動の背景にある願望や抑圧について考察する。

2. ルースが携わる家事、家族の世話

本作品は地平線を見渡す屋外の場面と登場人物の家の中を描く室内の場面が交互に現れる構成になっており、ロバートが憧れるような開けた外の世界と、狭苦しく閉塞的な家庭の対比が強調されている。そして室内についてのト書きには、そのときの家庭の状況がはっきりと表れている。例えば第2幕の冒頭には、“*The chairs appear shabby from lack of paint; the table cover is spotted and askew; holes show in the curtains*” (602; act 2) といった描写があり、家庭がうまく機能していないことが明らかになるが、これは主に家事を担っているルースがいかに疲弊しているかを示しているともいえるだろう。

実際、ルースの発言を見ると、彼女が家庭に縛られ、しかもそこから離れるのは困難であると考えていることが分かる。ルースは身体の不自由な母親が抱えるいらだちに理解を示しながらも、彼女の相手に疲れ、“*I’d like to be going away some place—like you!*” (579; act 1) とロバートにこぼすのである。その後、ロバートはルースに秘め続けていた思いを告白し、一緒に旅に出ようと持ち掛けるが、彼女は母親の世話があるから行くことはできないと主張する。このような発言からは、彼女が家庭を離れたいという願望を持ちつつも、そうすることは不可能であると考えていることが分かる。

他の場面においても、彼女は自身が女性であるが故に担わされている家庭での労働について“*You’re a man. You can’t know how awful and stupid it is—cooking and washing dishes all the time*” (624; act 2) と語っている。こうした台詞には、料理や洗濯といった家事は女性の領域であるという伝統的な考え方がルースの中に内面化されていること、一方でそこから抜け出したいという願望も持ち合わせていることが表れているといえるだろう。複雑な葛藤をいさきながらも、家庭の外に出ることはできないと信じているルースは、家族に自らの不満を解消させるべく攻撃的な言動を繰り返すようになるのである。

3. 生活における男性への依存

ルースは自分自身の力だけでは生活できないこともまた理解している。彼女は関係の悪化したロバートに対して“*Andy’s coming back, don’t forget that! He’ll attend to things like they should be. He’ll show what a man can do! I don’t need you*” (616; act 2) と言い放つが、それはあくまでもアンドリューがもうじき帰ってくるからであって、1人で生計を立てていく自信があるからではない。アンドリューであれロバートであれ、結局のところ男性に頼らなくては生きていけないというルースの状況が浮かび上がってくる。またルースの母親もロバートについて、“*It do make me mad, Kate Mayo, to see folks that God gave all the use of their limbs to potterin’ round and wastin’ time doin’ everything the wrong way*” (603; act 2) と述べている。彼女はルースと同様金を稼ぐ術は持たないうえに、身体が不自由であるため、家庭内の労働にも携わることができない。それゆえ身体が丈夫な者のなすがまになるしかないとを自覚し嘆きつつ、ロバートが安定した生活をもたらしてくれないことに苛立っているのである。

ルースも彼女の母親も、自身の力だけでは生活がままならないことを認識しながら、そのこと自体にいらだちを覚え、ロバートを非難する。その後の場面でアンドリューが一時的に帰ってくると、ルースは彼に家にとどま

るよう懇願する。作品冒頭においてはロバートに対して家に残るようにと言ったルースが、今度はアンドリューに対して同じことを懇願するのである。思いを打ち明けられた高揚感からロバートと暮らし始めたルースだが、作品後半になると、生活のためにより切実な問題として男性の力を必要とするようになっていくことが分かる。

4. 蓄積する不満と支配欲

ルースは複雑な思いを抱えながら、家事労働に精を出すことで家庭の中に自らの居場所を確保しようとしているようにも見える。ロバートは時間通りに食卓にやっけないことが常であるにもかかわらず、彼女は毎日食事を準備してふるまうのである。自身の母からそのことについて口を出されると、不機嫌そうに“*I'll do as I please about it; and thank you for not interfering*” (607; act 2)と述べるのみである。ルースが家事労働に苛立つ描写は多く見られるが、それでも尚、そうした労働に自らを強く関係付けようとする姿が印象的である。

またルースは娘メアリーとの関係においても、他者の介入を拒もうとするところがある。彼女はメアリーが自分の言うことを聞かずにロバートに懐くようなそぶりを見せるとき、“*She'll not do any such thing! She's got to learn to mind me!*” (609; act 2)と言ひ、ロバートを責め、メアリーに手を上げて分からせようとすらすらするのである。またロバートがメアリーを寝かしつけにいったときのルースの様子は“*a look of ill-concealed jealousy on her face*” (610; act 2)と描写されている。彼女は娘に対する愛情だけでなく、メアリーを夫に奪われたくないという感情にも支配されているといえるだろう。

母親・妻としての役割を全うすることを超えて、彼女は家族の生活に関わることを一手に引き受け、家庭での主導権を完全に握ろうとしているように見える。こうした言動は、女性として期待される役割から逃れられないことを認識するが故の複雑な葛藤に起因していると考えられる。彼女は心のどこかで遠くへ行くことへの憧れがありつつもそれが不可能であることを知っており、また経済的には男性を頼らなくては生活できないことも理解している。ロバートに夫としての役割を半ば強引に押し付けている彼女は、自分自身にも女性としての役割を課し、地平の彼方とは対照的で閉塞的な家庭の中で生きることしかできないのである。

5. おわりに

本作品においてルースとロバートは半ば衝動的に結婚に至るが、その生活は破綻し、悲劇的な結末を迎える。ルースを兄弟の運命を狂わせた女性としてとらえることも可能であるが、彼女が外の世界への憧れを口にしながらも家庭を出ることができないという事実は注目に値するだろう。室内の細かい描写や台詞を見ると、彼女が家庭の中で不満をつのらせていくこと、その結果として、家事や育児に過剰といえるほどこだわるようになっていくことが明らかになるのである。

ルースのそのような側面に注目すると、地平の彼方の広い外の世界と対置された、狭苦しい家庭の閉塞感がよりはっきりと浮かび上がる。悲劇の発端は兄弟の夢が入れ替わり、それぞれが自らの性質に合わない道に進んでしまったことであつたが、男性であるロバートが農場の経営を、女性が家事や家族の世話をというように、性別によって規定された役割を明確に担わされていることが彼らを縛りつけ、こうした結末の一因になっているといえるだろう。

参考文献

- Barlow, Judith E. “O’Neill’s Female Characters.” *The Cambridge Companion to Eugene O’Neill*, edited by Michael Manheim, Cambridge UP, 1998, pp.164-77.
- Chansky, Dorothy. *Kitchen Sink Realisms: Domestic Labor, Dining, and Drama in American Theatre*. U of Iowa P, 2015.
- Eisen, Kurt. *The Theatre of Eugene O’Neill: American Modernism on the World Stage*. Paperback ed., Methuen Drama, 2019.
- O’Neill, Eugene. *Beyond the Horizon. Complete Plays 1913-1920*, edited by Travis Bogard, The Library of America, 1988, pp.571-653.
- Wynstra, Beth. *Vows, Veils, and Masks: The Performance of Marriage in the Plays of Eugene O’Neill*. U of Iowa P, 2023.